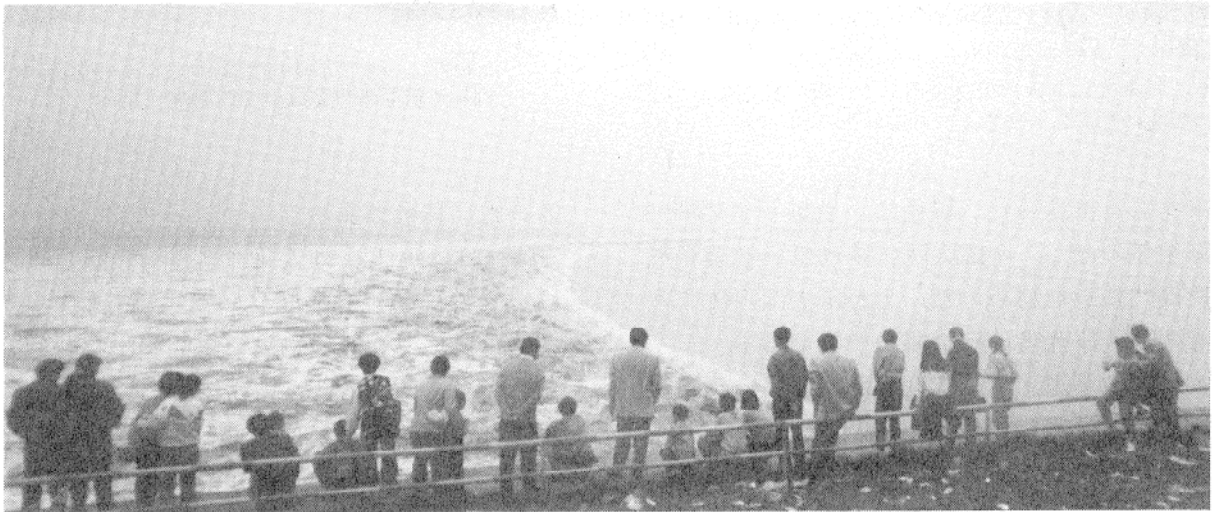


海外交流あれこれ話



海外交流

浜川 圭弘*



銭塘江の潮津波，対岸まで5kmの河幅を弧を描いて波頭の高さ8～10mの津波が時速20kmで押寄せる。杭州市の南東60kmの塩官の潮観台で。

“波濤万馬一斉に疾走するが如く，山岳を連ねてせまり来る如く，その音は雷霆の如し”一度は見てみたいものとかねがね思っていた銭塘江の潮津波に度肝を抜かれ，午後は一転して，三潭印月，池中池の西湖の風景に静を楽しむ，今，杭州から上海へ向かう特急列車の2階席でこの筆をとる。中国は今，改革開放の波に乗り世界一の高度成長ぶりで，この列車も12輛の総てが2階建のスマートな季節特急で，座席は3週間前に満席となる程の盛況，カラフルに着飾った若いお嬢さんに，大声ではしゃぐ若者の

グループあり，ほぼ20年前到北京→南京→無錫→上海と旅した時と比べて，車内の雰囲気も大違いである。

杭州-上海間，210kmをノンストップで走るこの列車や，特急と云えどもJRの新快速のように“いらいら”したひた走りではなく，いかにも大陸特急らしく，せいぜい時速80km程度のコンスタントスピードで“ゴットンゴットン”列車の旅らしい楽しみを感じさせてくれる。車窓の風景は稲穂が稔りをたれ，ところどころに蓮芋になすびに唐辛子と自家菜園が見られ，JR旧線の滋賀県を走っているような錯覚に落入る程である。座席横で，この旅の案内をしてくれているのは上海大学の魏光普教授で，此の度の上海大学と浙江大学訪問のアレンジメントとその招聘の主宰者である。彼は今から10数年前，同大学の講師時代に吾々の研究室に滞在し，アモルファスシリコンを使った集積型X線センサや光センサの研究グループの一人として

* Yoshihiro HAMAKAWA
1932年7月12日生
1958年大阪大学大学院工学研究科
電気工学専攻修了
現在，大阪大学基礎工学部，電気
工学科，半導体研究室，教授，工
学博士(大阪大学)，半導体電子工
学
TEL 06-850-6315
FAX 06-850-6316





西湖の風景、直径3.5km短径2.5kmの西湖の真中に“三潭印月”と呼ぶ島があり、その島の中に4つの池がある。日本で云う田毎タゴトの月よろしく、島の真中に立つと3つの池に月が3つ映るところからこの名がついている。

仕事をして下さった。現在は、上海大学材料科学系主任のほか、中国太陽エネルギー学会光電変換部門長をも務められ、云わば当浜川研究室出身の外人研究者の出世頭の一人である。

大阪大学基礎工学部で浜川研究室と云う看板を掲げ、“半導体材料の電子物性とその応用デバイス”に関する研究に従事して25年余りになる。その間、手がけてきたテーマがシリコンからⅢ-V族の光半導体、透明強誘電体やアモルファス材料等と、仕事を進める内に新素材と呼ばれるものになった。それらの応用デバイスがオプトエレクトロニクスや太陽光発電の分野など、時代の最先端技術の開拓に関わったことから、比較的多くの外国人客員研究員や留学生のお世話をしてきた。ちなみに現在の在員をしらべてみると、ECフェローシップ、学振を含めて、独逸人1人、チェコ1人、タイ国人1人、中国人1人の4人の研究員、それに留学生がインドネシア、韓国、独逸の3人で合計7名が滞在中である。そして、年間を通じて20人を越える客員や留学生の申し込みがあり、最近滞費のみならず、研究費も自国持ちと云うプロポーザルさえある程で、研究室にお座り下さる机や椅子のスペースもないと云ってお断わりす



上海科学会堂での中国太陽エネルギー学会、太陽光発電部門委員会での講演一場面。

るのも一苦勞である。

さて、こうした外人研究者をお預かりするのに、一番苦勞してきたことは、やはり住宅の問題である。おしかけて来る研究室出身の外人ばかりでなく、当方から望んで招いていする研究者でさえ、滞在期間が3ヶ月とか6ヶ月の場合、日本の敷金制度が一つの障害となつてとても難かしい。この件は日本独特と云いきれる国際交流の大問題である。この問題は先進諸外国はもとより、開発途上国でも著者の経験からして、期間の大小に拘わらず2LDK程度の宿舎が常に用意されている。

今ひとつは、たとえ安い下宿や宿舎が借りられる話がついても、日本家庭には家財道具一式を持ち込まなければ住めない……と云うのが習慣となっていることである。お茶わんやお皿などの食器類は一揃え何とか用意してさし上げるとしても、洋服箆笥や書棚まで必要な日本間には、例えそれが年に一回としても困ったものである。そんな時いつも、30年前イリノイ大学助教授として赴任した当時に受けた皆様からの親切を想いだし、御恩返しのつもりで尽くしているのが本音である。